



「夢」が書かれた1年半後（1923年の春）に撮影されたもの。向って左は父親の謝葆璋。

（人民文学出版社『冰心散文』より）

## 夢

冰心

（訳 富永涓子）

子供時代の生活を思い出すと、彼女にとって、それはまさに夢のようだと思われた！

金線の入った黒い軍服を着て、短い軍刀をぶら下げ、大きな白馬にまたがり、手綱を引いてゆっくりと海岸を行くとき、心の中はただ雄大で素晴らしい快感に満ちあふれていただけで、はたして今の自分を想像していたらどうか、このように静かに、ただペンを持って、空想の中にある気持ちを書いているということか？

彼女は十歳まで男装をし、父親はいつも彼女を軍人の娯楽の場である宴会に連れていっていた。父親の友人たちは彼女を見るとみんな「何と凛々しい、小さな軍人でしょうか！ 何歳ですか？」と褒め称え、父親はまずちよっとうなずいて、その相手と離れていく時に笑みを浮かべ、「彼は私

の息子であり、また私の娘ですよ」と言った。

彼女は進軍の太鼓を打ち、召集のラッパを吹くこともできた。モーゼル銃の装置も知っていたし、大砲弾を筒の中に装填することもできた。五、六年父親の傍らにいて無意識のうちに訓練を受け、まさに彼女は力強くたくましい小軍人になっていたのだ。

ほかの面はどうかというと？ ふだん女の子が喜ぶすべてのことを、彼女はむしろ好まなかった。これもまた無理のないことで、彼女の周りには女友達がいなかった。偶然山のふもとを通る何人かの村の少女たちを見かけたことはあった。彼女たちは赤や緑の色鮮やかな服を着ていて、纏足をしている少女にも会った。慌ただしい中だったので、彼女たちの日常生活を知ることはできなかった。しかも、彼女もこれらの印象を気にもしなかった。 刀一本、馬一頭、これこそが一生を過ごすのに足る全てなのだ！ 女の子のすることはいかに細々として煩わしいことが多いことか！

探照灯の明かりが広々と果てしない大海原を照らし、一面冷たい光を放つ、その明かりの影の下、旗の下、二列に並んだ傑出した軍人たちが、剣のチャリチャリとこすれ合う音の中で、整々肅々と一同盃を挙げ、中国万歳を祝う、その光景を見て、どうしてこの激昂する喜びの涙をあふれ出さずにおれようか？

彼女のこの夢もまた、目覚める時を迎えなければならなくなった！ 人生は夢なのか？

十歳になって故郷に帰り、女の子の服に換えて、従姉妹たちの中で、女の子らしさを学んだ。

すなわち、女の子は「何色もの絹糸できれいに針仕事ができること。香しく、美しい花を頭に挿すこと。身支度をし終えたら鏡に映してみること。大勢の人の中では、柔らかい女性らしい話をする事。涙が出る時はいつでも泣いていいこと」などを。

女の子というものは、確かにちょっと我儘で、箱入り娘のように愛らしくしているものである。

これらのことは彼女にとってとても新鮮で、また新しい自分を作り出すことのできる環境でもあった——とはいうものの、父親が彼女にくれた一本の刀は長いあいだ壁に掛けられていて、鞘を抜くと、冷たい光が目を射、そのつど彼女はぼんやりとしてしまうのだった。あの白馬、あの海岸、あの鉄砲を担ぐ軍人や……ぼんやりとした中で、いつまでも呆然としていた。従姉妹たちが窓の外で彼女を呼んでいるが、彼女は立ちっぱなしで、ただ無聊の涙を流していた。

彼女は後悔しているのだろうか？ もしかしたらそうかもしれないが、誰も知る由もない。軍人の生活、これは何と言う彼女の気性を創ったのだろう！ 黄昏時、兵営の中で吹かれる胡茄笛〔アシの葉で作った笛〕の音、これほど柔らかく悲しみをおさえた音があったろうか？ 世の中のやさしく暖かい境地を、まさか女の子だけが占めることができるかともいうのか？

海の上での月夜、星空、見張り台でひとり銃に寄り掛かっている時、重く沈んだ大空の下、人は静まり、海もまた深く眠ってしまっていた。「海と空以外の家など！」 その時の気持ちは軍人のものなのか、詩人のものなのか？ それは、二筋の悲しい糸が絡みついた地点であったのだ。

いくつかの無聊な英雄の涙のほかに、まだ何があるというのだろうか？ 彼女は自分の立場に安んじたのだった！ 人生がもし輪のように循環するとしたら、あるいは“将来”から、また過去へ戻る道に行くかもしれない、しかしこれもまた何とつまらないことだろう！

深く刻まれている十年間の印象は、今、彼女の中に残され、それはたくましく意志の固い性質となった——彼女は相変わらずあの整った歩調を見、あの悲壮な胡茄笛を聴くのが好きだ。しかし、好きと言うよりは怖れていると言ったほうが正しいのではなからうか。

刀を持って馬で駆けるのと、深く考えて執筆する彼女と、もともとは一人の人間であるが、時はこれらのことを隔ててしまった……。

子供時代！ それはただ心に深く刻み込まれた夢なのだろうか？

1921年10月1日

謝冰心(1900-99):福建省出身。中国近代文学における代表的な作家。

本訳に使用したテキスト:『冰心散文』,北京,人民文学出版社,2005, pp.27-28.



(中国語原文) 梦 冰心

她回想起童年的生涯，真是如同一梦罢了！穿着黑色带金线的军服，佩着一柄短短的军刀，骑在很高的白马上，在海岸边缓辔徐行的时候，心里只充满了壮美的快感，几曾想到现在的自己，是这般的静寂，只拿着一枝笔儿，写她幻想中的情绪呢？

她男装到了十岁，十岁以前，她父亲常常带她去参与那军人娱乐会。朋友们一见都夸奖说，“好英武的一个小军人！今年几岁了？”父亲先一面答应着，临走时才微笑说，“他是我的儿子，但也是我的女儿。”

她会打走队的鼓，会吹召集的喇叭。知道毛瑟枪里的机关。也会将很大的炮弹，旋进炮腔里。五六年父亲身畔无意中的训练，真将她做成很矫健的小军人了。

别的方面呢？平常女孩子所喜好的事，她却一点都不爱。这也难怪她，她的四围并没有别的女伴，偶然看见山下经过的几个村里的小姑娘，穿着大红大绿的衣裳，裹着很小的脚。匆匆一面里，她无从知道他们平居的生活。而且她也不把这些印象，放在心上。一把刀，一匹马，便堪过尽一生了！女孩子的事，是何等的琐碎烦腻呵！当探

海的电灯射在浩浩无边的大海上，发出一片一片的寒光，灯影下，旗影下，两排儿沉豪英毅的军官，在剑佩锵锵的声里，整齐严肃的一同举起杯来，祝中国万岁的时候，这光景，是这样的使人涌出慷慨的快乐的眼泪呢？

她这梦也应当到了醒觉的时候了！人生就是一梦么？

十岁回到故乡去，换上了女孩子的衣服，在姊妹群中，学到了女儿情性：五色的丝线，是能做成好看的活计的；香的，美丽的花，是要插在头上的；镜子是妆束完时要照一照的；在众人中间坐着，是要说些很细腻很温柔的话的；眼泪是时常要落下来的。女孩子是总有点脾气，带点娇贵的样子的。

这也是很新颖，很能造就他的环境——但她父亲送给她的一把佩刀，还长日挂在窗前。拔出鞘来，寒光射眼，她每每呆住了。白马呵，海岸呵，荷枪的军人呵……模糊中有无穷的怅惘。姊妹们在窗外唤她，她也不出去了。站了半天，只掉下几点无聊的眼泪。

她后悔么？也许是，但有谁知道呢！军人的生活，是怎样的造就了她的性情呵！黄昏时营幕里吹出来的笳声，不更是抑场凄婉么？世界上软款温柔的境地，难道只有女孩儿可以占有么？海上的月夜，星夜，眺台独立倚枪翘首的时候；沉沉的天幕下，人静了，海也浓睡了，——“海天以外的家！”这时的情怀，是诗人的还是军人的呢？是两缕悲壮的丝交织之点呵！

除了几点无聊的英雄泪，还有甚么？她安于自己的境地了！生命如果是圈儿般的循环，或者便从“将来”，又走向“过去”的道上去，但这也是无聊呵！

十年深刻的印象，遗留于她现在的生活中的，只是矫强的性资了——她依旧是喜欢看那整齐的步伐，听那悲壮的军笳。但与其说她是喜欢看，喜欢听，不如说她是怕看，怕听罢。

横刀跃马，和执笔沉思的她，原都是一个人，然而时代将这些事隔开了……

童年！ 只是一个深刻的梦么？

1921年10月1日

□□□□□